菊水小学校　学校だより　第１２号

R6．12．5

文責　井上雄治

『だれかの笑顔のために』

平和のバトン

前期の終業式で、**『百聞は一見にしかず』**という言葉を紹介しました。後期は、集団宿泊教室、修学旅行と現地に行って実際に見て学ぶ機会があるからです。『百聞は一見にしかず』とは、**「人から何度も聞くより、一度実際に自分の目で見る方が確かであり、よくわかる。」**という意味です。子どもたちにも、この意味を知らせ、実際に自分の目で見て、多くのことを学んできてほしいと話しました。11 月 21 日・22 日は、６年生の修学旅行でした。６年生は自分の足で現地を歩き、実際に見て聴いて、「平和」について考える機会を持つことができました。

４歳の時に被ばくされた語り部の方（現在８３歳）のお話を聴くことができました。講話のあと、学校からのお礼をお渡ししました。そのお返しの言葉に私は感動しました。「ありがとうございます。このお金は、これからの私たち（日本被団協：日本原水爆被害者団体協議会）の活動のために使わせていただきます。」と答えられたのです。「私たちの活動のために」とはどんな活動なのか、その思いを講話の最後に語られていました。

『世界の人々を、そしてみなさんを原水爆や戦争の悲劇にあわせないために、

命のある限りがんばります。』

講話終了後、会場から出ようとしたとき、一人の児童が語り部の方の目の前に歩み出ました。何か質問でもするのかと思いついていくと、その児童は語り部の方に「ありがとうございました。」と頭を下げたのです。その行動を見て、胸が熱くなりました。「どうしてみんなでお礼を言った後に、一人でお礼を言いに行ったの。感謝の気持ちを伝えたいという思いになったのかな？」と尋ねると、その子は笑顔で「はい」と答えてくれました。子どもたちが**『平和のバトン』**を受け継いでくれたと感じることができた出来事でした。

「思いあれば活動誰でも」（参考：令和 6 年 12 月 5 日　熊日新聞記事より）

日本原水爆被害者団体協議会（被団協）へのノーベル平和賞授賞式には、核兵器廃絶署名を国連に届ける活動をする「高校生平和大使４人も渡航し、現地の高校で「出前授業」をする。大使の中で唯一、被爆地でない熊本から参加する九州学院２年島津さんは、小学６年の修学旅行で訪れた長崎原爆資料館で見た写真**「焼き場にたつ少年」**が強く印象に残った。息を引き取った幼子を背負い、男児が口を結んで直立していた。「これからどうしたらいいか分からなかったんだろうな」。胸が痛んだ。

この経験が平和を強く意識するきっかけになった。ただ、友人とは温度差をかんじていた。中学時代、８月６日や９日に「今日って原爆が落とされた日だよね」と投げかけても「そういえばそうだね」との返事。世界にも多くの核兵器が残っているのに、７９年前の悲劇を他人事のように捉えていないか。歴史や被害を伝える必要性を実感した。

「私たちが被爆者の証言を聞ける最後の世代と言われている。

聞いたからには語り継がないといけない」